

受講生の皆さまへ

講座の再開にあたって

思いもかけず、現代社会は、ウィルスという未曾有の災禍に遭遇することになりました。それは突然にやって来て、世界中を混乱に陥れ、私たちの講座もまた例に漏れず、閉鎖を余儀なくされました。愛する人々に自由にも会えず、「親密」であることを拒絶する一。そんな「新しい日常」への変革を迫る新型ウィルスの襲来は、史上まれにみる、人類への挑戦であるとも言えます。そんな中、幸運にも皆さまとの再会が叶い、今一度開講できる運びとなりましたこと、感無量でございます。

長い自粛の期間を、書斎にある書物と、移りゆく自然に囲まれて過ごしました。こんな非常事態だというのに、春の花々は咲いては散り、鳥たちも来ては囀ります。「時に感じては花にも涙を濺ぎ、別れを恨みては鳥にも心を驚かす」。この間ずっと念頭を去らなかつた詩が、「国破れて山河在り」で始まる杜甫の「春望」の一節であったことを思い出し、そんな人と自然との関わりは、今も昔も少しも変わることなく続いてきたのだな…と感じ入る日々でした。

そして、今さらながら気づいたことは、私たち人類もまた、こうした自然の一部に過ぎないのだ、というあたりまえの事実です。科学技術がどこまで進歩しようと、医学の知識がどれほど深化しようと、決して自然を凌駕することはできないのだ、という自覚です。都会化した日常生活は、ともすれば私たちにそれを忘れさせる一。現代人のあやうさは、まさにそこにあるのではないか。

ここに思い至る時、古代の文献は、決して過去の遺産や手すさびの絵空事ではなく、先人たちが心血を注いで後世に残してくれた知恵の結晶として、新たな価値を帯びてくるものと思われまふ。自然を神と崇めて敬虔に祭り、真摯に向き合って共に生きてきた、祖先の記憶と記録。今こそ、これらの文献が代々を経て伝えられたことに敬意を表し、次の世代へと確かに受け継いでゆくことを、私の使命とする所存です。

皆さま、どうか今後ともよろしく願いいたします。

令和2年 夏

「万葉集講座」「日本書紀講座」講師 南山 かおり